

## ああ堂々の？輸送船

大牟田市 織田 隆二郎

戦時中よく歌われた軍歌、「暁に祈る」の中に『ああ堂々の輸送船……』という歌詞があった。当時の人々はこの歌を聞いて、日本陸軍の輸送船団が荒波をけ立てて進む勇壮な光景を連想したに違いない。しかし、乗っていた将兵が実際にどんな体験をしていたかはほとんど知られていないと思うので、私の場合を紹介してみる。

みぞれが冷たく降る1945年1月12日、私たちを乗せた輸送船「第16多聞丸」は、台湾へ向け門司港を出港した。何隻で船団を組んでいたか思い出せないが、多聞丸は23000t。粗製乱造で知られた『戦時規格型』の貨物船で、速力も最高7ノットという何とも頼りない船だった。

ソ連と満州（後者は現在の中国東北部）国境に展開していた第12師団が台湾に移駐することになったため、全将兵と兵器、弾薬などを輸送するのが船団の主要目的。私たち見習士官グループ約30人は12師団と直接関係はなかったが、台北の第10方面軍司令部に転属するので行を共にしたわけだ。私たちは当時小倉市（現在は北九州市）北方にあった野戦重砲兵第5、第6両連隊の出身。甲種幹部候補生試験に合格、旧満州国ハルビン市近くの阿城にあった関東軍砲兵教育隊で8ヶ月間の教育を受け、やっと見習士官になったばかりだった。

戦争前、門司港と台湾の基隆（キールン）港は定期航路で結ばれ、片道2昼夜で行き着けたが、私たちが基隆に上陸できたのは1月26日、丸々2週間を要したことになる。米軍潜水艦の魚雷攻撃を避けるため東シナ海を大きく迂回、中国大陸の沿岸沿いに南下したためだ。もうその頃は台湾まで全船『無傷』でたどりつける輸送船団は皆無に近い状態だった。

私たちの不安を決定的にしたのは、沈没に備え『救命胴衣』が支給された時だった。8ヶ月前、満州に渡った時に博釜（博多一釜山）連絡船で配られたのはコルク製のまともな胴衣だったが、今度受け取ったのは長さ40cmほどに切りそろえた青竹数本ずつをひもでつなぎ、『振り分け荷物』のように胸と背中に下げただけのもの。私たちは満州から来ただけに重い外套を着た上、双眼鏡や図のう、軍刀などの装具も身につけている。沈没で海に投げ出された場合、こんな『胴衣』でどうして何時間も浮いていることができよう。全くの気休めのように思われ、暗然としたのをおぼえている。

最初の悲劇はある日の未明、上海辺りの沖を航行中に発生した。すぐ隣を走っていた僚船が米潜の雷撃を受け轟（ごう）沈、数千の人命が瞬時に失われたのである。『この付近は比較的遠浅なので米潜も手を出せまい……と高をくくっているスキを突かれたのだ』と言う者もいた。爆雷投下など一しきりの騒ぎが収まった後、甲板に出てみたが、暁暗の海が無気味に静まり返っていただけだった。

間もなく多聞丸も不幸に見舞われた。『蚕棚』の崩壊で死者を出したのだ。航海中、兵隊達

は船倉を上下3段に仕切った中に押し込められていた。それを兵隊達は自嘲（じちょう）も込めて蚕棚と呼んでいたが、しけで船が大揺れした瞬間、その木組みが突然壊れ、一番下の仕切りにいたうちの数人が圧死した。私たちの仲間では福田という見習士官（福岡市。西南学院卒）が犠牲となり、遺体は毛髪の一部を残し毛布にくるんで水葬した。こんな場合も恐らく戦死扱いはされたと思うが、あまりに痛ましい最後だった。

死者といえば、仮設便所と炊事場が隣りあわせという劣悪な衛生環境もあって船内に赤痢が流行、この方も何人か犠牲者が出た。私自身、下痢はしていたものの赤痢にはかからなかったが、いつの間にか下着にシラミが大繁殖？していた。いつ沈没するかわからないので裸にもなれず、『救命胴衣』だけ外して柱などに背中をこすり付けるのだが、それぐらいで黙ってくれる相手ではない。情けないことに彼らとの戦いは上陸の日までつづいた。

泣き面にハチだったのは、間もなく多聞丸が船団からはぐれてしまったこと。エンジンの故障か、それとも別の理由によるものか分からない。しかし僚船も、出航以来陰になり日なたになって船団を見守ってくれた護衛駆逐艦も、いつの間にか姿を消して全くの一人旅。速度ものろいし、『これで電撃を受けたら……』と背筋が寒くなった。

この悩みは数日後に解消、どうにか船団に合流できたが、最後の難関が待ちかまえていた。船団はやっと基隆港に近づいたが、港口付近には何隻もの米潜が潜み、出入りする日本の輸送船を片っぱしから沈めるので付近一帯が輸送船の『墓場』になっているというのである。

目前に海岸線と山並みは迫っているものの、水泳が苦手の私に果たして泳ぎ着くことができるだろうか。いろいろと気をもんでいるうち、多聞丸は何とか入港、合図の汽笛を鳴らした。『雨の港町』として有名な基隆はこの日も雨。岸壁には病院船「高砂丸」が白い巨体を横付けしていた。こうして私たちは2週間に及ぶ『苦難の船旅』から、やっと解放されたのである。

なお、私たち見習士官の一行は上陸翌日、台北市の第10方面軍司令部（司令官は安藤利吉大将）に出頭、到着を報告した。早速配属先が決まり、10人近くが沖縄の第32軍、私を含む残りは台湾の第40軍の司令部や砲兵連隊に配分された。『沖縄組』は内地に帰れると大喜びしていたが、結果は周知のような米軍との死闘に巻き込まれた。私の知る限りでも阿曾山幸男（福岡市）、井村（名前は失念。長崎県？出身）両君が戦死した。重傷を負い今なお後遺症に悩む者も何人かいるそうだ。

今はただ、沖縄や東シナ海で無念の最期を遂げた人々に衷心から哀悼をささげる一方、後に続く世代が二度と私たちのような体験をしないですむよう、神仏に祈るばかりである。